

私が勤務している施設に、2月末入所されたご夫婦がいらっしゃいます。2人とも認知症の診断をされています。

お互いの顔も名前も忘れてしまっていて「昔、見た事がある」、とは言うものの、「夫婦じゃあないよ」と話します。しかし、ご主人は気にかかる様子で、車椅子に座っている奥様の隣に行き、肩や背中をさすったり、仲良く話しをしていると思えば、突然口論にもなります。そうするとご主人はその場を離れて、「弱っちゃうよ、なんとかして」と困った顔をして、私達の所に来て愚痴をこぼします。しばらくするとまた、お互い寄り添っています。

息子さんの話題になると、2人の会話は成り立っていますが、奥さんが「〇〇(息子さん)って私達の子供だっけ?」とご主人に聞くと「うん、うん」とご主人が頷くのを見て、奥さんも大きく頷き、また会話が始まります。最近では、お互いを認識しつつあるようです。

認知症は「記憶の障害」ではなく、「わかっていること＝認識」と「知っていること＝記憶」のミスマッチで起こるそうです。通常は五感で得た情報をもとに頭の中の記憶と照合し行動を起こしますが、認知症の人はこの一連の流れがうまくいかないため、物事を正しく認識するのが苦手になっていて、自分の夫、妻、子供に気づかないのです。

記憶が消えてしまったわけではなく「わかっていること」と「知っていること」を結びつけられないのです。そういう視点を持ち、「その人を知る」ことで、認知症の人の困りごとの解決が上手く見つけることができると思います。

例え、顔や名前が一致しなくても、一緒にいて「落ち着くな、安心するな」という心地良さも大切だと思います。私達が認知症の人と関わる時は、笑顔で、話すトーンは優しく、語りかけるように、そして、丁寧に傾聴することで安心して頂けると思います。

ご夫婦共通の困りごとは、『どうすれば、家に帰れるか?』です。毎日、一日に何度も何度も繰り返されます。私達はそんな2人を見守り、傾聴し、一緒に考え、時には口論の仲裁に入ったりしています。

文責 渋澤 美代子